

西園寺公望のフランス語蔵書

奥村 功

1. 西園寺文庫のあらまし

西園寺公望（1849-1940）がどういうフランス書を身辺においていたかは、興味をそそる事柄であろう。伝統的な教養でも、公家の家学でもないだけに、それは公望個人の関心のありかをよく示すであろう。

そこには、若いころのパリ遊学のなごりと、そののちの経歴のあいだにはぐくまれた、国事にわたる関心事とが、ともどもに瞥見できよう。もとより、この人は出自、閲歴ともに特別にめぐまれた例外的な存在ではあるけれども、その関心の、時代を追ったひろがり、やはり近代日本の歴史をそこに映していると言える。

西園寺の蔵書は、その家塾の名を継承する立命館大学が所蔵する「西園寺文庫」にその全容をほぼ見ることができる。ただし、漢籍の大きな部分は京都大学図書館に収まっている。また、西園寺の別邸坐漁荘が移築された明治村にも若干の手沢本が保存されている。

『西園寺文庫目録』（以下『目録』）が、すでに立命館大学図書館によって1990年に公刊されている。これによると、漢籍413点、和書2,884点、洋書173点であるから、蔵書の規模から見て、洋書は和漢書の比ではない。また、内容から見ても、美本をかなりを含むとはいえ、稀覯書と目すべきものはわずかであることも、和漢書の場合とはことなる。さらにまた、専門的に、ひとつの領域を網羅した蔵書でもない。しかし、規模は小さいながら、洋書はそれなりに多様な構成を示し、西園寺の生涯における関心のありどころを見せており、その形成のあととはひとつの検討の対象になりうる。

文庫のなりたちについては、『目録』冒頭に衣笠安喜氏による簡潔な記述がある²⁾。それを参考に、さらにかいつまんで述べると、西園寺は生前3度にわたって立命館大学へ蔵書を寄贈した。「最初の寄贈は、1925（大正14）年、現在の立命館図書館の前身である立命館文庫の開設を記念した英・仏書180冊の寄贈であり、…」とある。その冊数からすれば、現在の洋書のあらかたがそこに含まれていたことになろう。文庫の当初の名前は「西園寺公文庫」であったようである。

ただし、現在文庫に収められるすべてが西園寺公の蔵書であったわけではないことにも、検討にあたって、まず注意が必要であろう。『目録』の記述にもあるように³⁾、寄贈後の補充がいくらかある。洋書については、第1に、公の秘書であり、立命館大学の創立者である中川小十郎（1866-1944）による寄贈本がいくらか加わっている。これは「西園寺公文庫備附」「中川小十郎寄

贈」の印を受けており、英書7件、独書1件と思われる。これらには時に、中川のものかと思われる書入れが見られる。第2に、大学が購入したものも少数加わっている。これら2種の補充は、文庫の性質上あってふさわしいものから成っているが、西園寺の手沢本ではない。

西園寺自身の書入れがあれば、当然興味の対象になるが、これは文庫において稀である。洋書の場合、例外的にフランス語の訳語を記したり、備忘のために若干の個所に黒や赤の鉛筆による下線、あるいは縦に一線を引くなどが数冊に見られる。しかし、この文庫は一般の閲覧を許しているから、それらが西園寺自身の手になるものか判定はむづかしい。

献呈本の調査は蔵書の形成を知るのに欠かせない。洋書についてその数は多くはないが、西園寺にとっては忘れられない数冊を含んでいる。これらは、その時期ごとに、のちの章で言及する。

『目録』の洋書173件（199冊⁴¹）を言語別に分類すれば、多くはフランス語で117件、英語46件、ドイツ語7件、その他3件（ロシア語1件、ラテン語1件、日本語のローマ字表記1件）になる。こうしたなかで、政界に身をおいてから手元にあつまった、冊子類の官庁文書には英語のものが多いが、これらと前述の中川小十郎寄贈の英書を別にすると、フランス語の比重はますます高くなる。この文章はフランス書が主な記述の対象であるが、それ以外にも及ぶこととする。

図書の内容は多岐にわたるが、歴史、文学関係の多いのが目につく。のちに詳しく見るが、かなりの部分がフランス語の戯曲、ことに歌劇、喜歌劇の台本である。『目録』を部立てで言えば、総記4件、哲学5件、歴史52件、社会26件、科学3件、商工業5件、芸術16件、言語15件、文学47件となっているが、若干の錯誤がある。同一の分類番号になるべき一連の図書が、巻によって異った部立てに入ったり、同類の書籍がまったくべつの部に分類されていたりというたぐいである。

文庫の姿は『目録』に目を通すだけで明らかになるわけでは必ずしもない。その全体をつかむには、時間の順に蔵書の形成をみなおすとともに、内容別にもういちど整理しなおすことが必要になる。

刊行の時期は、1842年、1868年という例、あるいは刊行年不明はあるが、1870年から歿年の1940年のあいだに収まる。しかし、フランス書について言えば、（季節はずれのような36年版のピエール・ロチの旧作、および37年の曽我祐邦のパンフレット2篇を別にすれば）、ほとんど1916年までのものである。もちろん、刊行年は収書の時期を示すとはかぎらないが、その内容から、フランス書収書の時期はおおよそ四つに分けられよう。

すなわち、最初の滞在の1871年3月から80年まで（10月帰国）。ついで、82年3月憲法調査随員以降、91年8月帰国までの、オーストリー公使、ドイツ公使（ベルギー公使兼勤）の時期。さらに、その後1912年まで、国政にあたって文相、外相、枢密院議長、内閣総理大臣などをそれぞれ数度歴任した時期（その間に、1896年末からほぼ1年のヨーロッパ外遊をはさむ）。最後、1912年12月に元老となり、世界大戦のパリ講和会議に全権大使として出席する時期（1919年8月帰国）。

ただし、この稿ではすべての洋書を一応視野に入れるので、検討は1880年までの最初のフランス滞在を第1期とし、それ以降20年ごと、生涯を四つの期間に分けて記述することとする。

蔵書のフランス書に仮綴のものは少く、多くが装丁されている。そのほとんどは同じ装丁で、裏表紙隅に小さく「三光堂 / 浅見」、あるいは「SANKODO / ASAMI」と印がある。在京の店であろう。

- 1) 挙げるとすれば、(0129) *Poèmes de la libellule* (蜻蛉集) くらいであろう。ただし、これは大学による後日の購入で、西園寺の手沢本ではない。なお、以下、書名の前におく()内の4桁の数字は『目録』「洋書の部」の配列番号。
- 2) 衣笠安喜「『西園寺文庫目録』刊行にあたって」。
- 3) 『目録』 p. v.
- 4) 件数は『目録』の分類にしたがう。なお、文庫に現物があり分類番号が付きながら、『目録』に脱落している図書が次の4件ある。
 - a. SB 198. 2 / L23
Histoire politique des papes, nouvelle édition. / par P. Lanfrey. Paris : Charpentier et Cie, 1873.
 - b. SB 209. 71 / P26
Essai critique et notes sur l'altération officielle des documents belges / par Fernand Passelecq, directeur du bureau documentaire belge. Paris et Nancy : Librairie Militaire Berger-Levrault, 1916. (Pages d'histoire-1914-1916) (『目録』(0019)のつづき)
 - c. SB 952 / P36
Les Amants de Pise / par J. Péladan. Paris : E. Flammarion, 1912. (Les drames de la conscience) 352 p.
 - d. SB 952 / G17
Le Roi de Lahore : opéra en cinq actes, six tableaux / par Louis Gallet ; musique de J. Massenet. Paris : Calmann-Lévy, 1877.

なお、この稿では、『目録』が手元にない読者にも文庫の概要がつかめるように、本文あるいは註において和洋を適宜に使いわけつつ、主だった書名を示すことにする。

また、『目録』の錯誤のうち必要なものは、註において訂正をこころみる。書誌的記述の体裁は『目録』にならうが、やや簡略にとどめる。

2. 1870年代の収書

1870年代は、西園寺にとってはすなわちパリ時代であった。71年3月18日、パリ・コミューヌの動乱が普仏戦争中のパリに起こる。その直後の26日〔明治4年2月6日にあたる〕という大変な時期に西園寺はパリに着く。望一郎21才。以来、80年10月横浜に入港するまでの10年間で西園寺の最初のフランス滞在であった。

西園寺は恵まれた遊学の日々を、パリという「文明都雅ノ尖点」¹⁾で送る。のちの回想「アコラス翁の政治家」と題する一文に「余が少時巴里にあるや多く交遊を主として一事を勉めざるを見て、アコラス翁余に告げて曰く、…」とあるような、それは余裕ある留學生活であったが、しかし、よく勉めた日々であったことは、78年5月に法学士号を得ていることでも知れる。

1860、および70年代刊行の図書は30数件ある（ただし、刊行年の記載のないものの推定を含む）が、その多くは内容から見てこの修學時代に購入されたと考えられる。ただし、演劇の台本類には、80年代以降の観劇の際に求められたものもあるかも知れない。

西園寺の学科であるはずの法律政治関係の図書は、しかし3点に過ぎない。かなりの教本類があったにちがいないが、どこかに残っているのか、あるいは、書き込みなどがあることから処分されたものか？ 現存する3点とは、モンテスキューの『法の精神』、それと、モンテスキュー

と関わりのある内容で『マキアヴェリとモンテスキューの地獄での対話、または19世紀におけるマキアヴェリの政治学』（著者は匿名、ブリュッセル刊、1868年³⁾）、さらにエミール・アコラス『非嫡出子』（1870年、第2版⁴⁾）である。

なかで、アコラスの著書についてはよく紹介される。西園寺には忘れられない1冊であるからこそ保存されたのであろう。西園寺は「余が師エミル・アコラス翁はこの世紀の半ば頃より、仏国の政治思想界に少なからぬ勢力を有し、…クレマンソー、フロクレー等の急進黨多くその門に出入し、余もまた彼等と翁の家に於て相会したること少なからざりき⁵⁾」と述べているが、そのつながりを示して著書『非嫡出子』の扉には、西園寺にとっては学生時代のかけがいのない思い出といつてよい献辞が記されている。⁶⁾

西洋での生活のための手ほどきの書と云うるものがいくつかある。まず、G. ブレーズ編『都会と田舎における実際生活の百科』（1876年、第5版。初版1859年⁷⁾）。さらに、ルイーズ・ダルク『社交の知識…生活のあらゆる機会における心得続編』（1877年、第5版⁸⁾）。いずれも、こうした日常の手引書としてありふれたもので、著者にはそれぞれ類書が多い。文学書として、ヴォルテールとペランジェの作品集がそれぞれ1冊づつあるのも、この時期の共和主義の風潮をうかがわせる。前者は1878年発行の死後100年記念版である。

注目されていると思われるのは、宗教問題を扱った2冊の小さな本である。

1冊目は『フランス法の前でのフランス聖職者⁹⁾』と目録にある小さな本だが、この書名は前半のもので、後半は『フランス法の前でのジェジュイット¹⁰⁾』という。2冊目は、『目録』に脱落しているピエール・ランフレ『歴代法王の政治史¹¹⁾』。西園寺がどういう関心から読んだか不審に思われるかも知れないが、これらは第3共和政発足時の強い反教権主義の思潮のなかで書かれた著作で、西園寺が共和主義者たちとの交遊のなかで関心を覚えたものにちがいない。

あとは戯曲〔歌劇、喜歌劇をふくむ〕の脚本18点¹²⁾である。この数が一番多い。80年代以降、1910年までに刊行され、西園寺の手元にのこる台本も他に10点あるが、多くは70年代のものと言える。したがって、観劇の生活は最初のフランス滞在が中心であったとしていいだろう。演劇関係の図書については、便宜上、時期を問わず、ここでざっと触れることとする。台本のほとんどは、ミッシェル・レヴィ〔のちのカルマン・レヴィ〕が出版していた新作戯曲の袖珍版叢書である。

そのなかで、せりふの芝居の数はむしろすくなく、歌劇、喜歌劇が多い。せりふ劇は、オクターヴ・ファイエの戯曲集1点、デュマ・フィス3点〔ただし『椿姫』はない〕、メイヤック、アレヴィ合作の『フルーフルー』（1870年初版本）、それにエドモン・ロスタンの代表的な3作『シラノ・ドゥ・ベルジュラック』（1898年初版本）、『鷺の子』（1910年版）、『シャントクレール』（1910年初版本）くらいである。

デュマの『ジョルジュ公妃』（1872年、第4版¹³⁾）の最初の2ページには、珍しいことに、おそらく西園寺の手でいくつかの語にペンで和訳がつけられている。パリに着いた翌年のこと、フランス語の力はまだ十分ではなかったであろう。Elle s'assurait que vous ne soupçonnerez rien. というせりふの assurait の下に「固クスル」などと、いささか心もとない。

脚本のあらかたを占める歌劇、喜歌劇の半ば10点近くが歌劇に分類できよう。有名な作曲家のものでは、トマの『ハムレット』（1869年版）、グノーの『ジャンヌ・ダルク』（1873年初演、74年刊）、マスネー『ラホール王』（1877年初版本¹⁴⁾）、『サフォ』（1884年再演、再刊）、メイエルベール

の『予言者』（初演49年、1876年版、台本スクリーン）、ドゥリートの『ラクメ』（1883年初版本）などがある。

オペラ・コミック、オペラ・ブッフ、ルヴェなどと題されるものを作曲家で挙げれば、オフエンバックが4点、ルコックが3点（『アンゴ夫人の娘』、『ジロフレ・ジロフラ』など）、それにトマの『ミニョン』である。

観劇の機会は、文庫に残る脚本の数よりはるかに多かったであろう。さんざめくグラン・ブールヴァールを西園寺が逍遙する夕べは数知れなかったであろう。ガルニエのオペラの開場は1875年1月のことであり、73年10月まではル・ペルチエ街のオペラへ、そして、その焼失のあとはヴァンタドゥール劇場へ通ったことになる。文庫架蔵の美本にシャルル・ガルニエ『パリ新オペラ座』2巻本¹⁶⁾があるが、西園寺にとっても新オペラ座の竣工はもちろん大きな出来事であったはずである。

西園寺の収書は（E. オージェはほとんど欠く¹⁷⁾）当代人気の作者、演目にほぼしたがったものであることがうかがわれる。古典劇は1冊もない。また、当時の新傾向といえるベックの作品や、1887年に始まるアントワヌの自由劇場の演目はもちろん見当たらない。しかし、それなりに観劇の数を重ねたあげく、演劇の知識をさらに深めようという気持ちもきざしてきたのであろう。A. ロワイエ『世界演劇史』全6巻¹⁸⁾が蔵されている。この著作は1878年に完結しているが、購入は80年代のことかも知れない。さらに、F. サルセーの劇評集『演劇四十年』全8巻（1900-02年）も加わっている。

この時期の人気役者といえば当然ムネ・シュリ、サラ・ベルナールが想起される。たとえば、デュマ・フィスの『外国の女』には76年コメディ・フランセーズでの初演の役人替名が示されているが、そこには両優のほか、座長のエドモン・ゴー、コ克蘭などが居並んで大顔合せである。

1) 久米邦武の表現（『米欧回覧実記』第三編 第四十二巻。岩波文庫版、第3巻 p. 55）

2) 『陶庵随筆』中公文庫版 p. 16.

3) (0048) SB 289. 3 / Ma 16

Dialogue aux enfers entre Machiavel et Montesquieu, ou, La politique de Machiavel au XIXe siècle / par un contemporain. 12e éd. Bruxelles, 1868.

4) (0078) SB 334. 6 / A 15

L'enfant né hors mariage / par Emile Acolas. 2e éd. Paris : G. Baillière, 1870.

5) 『陶庵随筆』中公文庫版 p. 15.

6) A mon cher élève	（訳文） 親しい学生にして
et ami,	友人たる
Boitiro Saionji	西園寺望一郎に
son tout dévoué	忠実の念をもって
Emile Acolas	エミール・アコラス
8 Juin 76	76年6月8日

7) (0003) SB 035 / B 33

Dictionnaire universel de la vie pratique à la ville et à la campagne. / rédigé avec la collaboration d'auteurs spéciaux par G. Belèze. 5e éd. Paris : Hachette, 1876.

この本には、Jacques Lechevalier, 23. r. Racine と古書店のラベルがついている。番地は西園寺が

住んでいたホテルと同一。おなじ建物に店舗があったのであろう。

- 8) (0063) SB 302. 35 / A 41

La science du monde : suite au savoir-vivre en toutes les circonstances de la vie / par Louise d'Alq. 5e éd. Paris : Librairie de la famille, 1877. (Encyclopédie de la famille)

Mme Louise d'Alq は筆名で、本名 Alquié de Rieupeyroux. 1870-80年代にわたって savoir-vivre (生活作法) を主とした著作を出している。

- 9) (0009) SB 195. 2 / O 91

Le clergé français devant la loi française / par J. Oudiganne et Charles Bigot. Paris : Maurice Dreyfous, [18--]

- 10) Les Jésuites devant la loi française / par Castagnary. Paris : Georges Decaux, [18--] (?)

- 11) 書名は註, 1-4 a. に示した。

- 12) 『目録』では、「芸術」と「文学」の部に分れて分類されている。

- 13) (0144) SB 952 / D 96

La princesse Georges / par Alexandre Dumas fils. 4e éd. Paris : C. Lévy, 1877.

- 14) 『目録』に脱落。書名は註, 1-4 d. に示した。

- 15) 『木戸日記』明治6(1873)年2月15日の条に、西園寺らの誘いで仮面舞踏会を一見した記述があるが、これはこのオペラ座でのことと思われる。

- 16) (0104) SB 766. 1 / G 23

Le nouvel Opéra de Paris / par Charles Garnier. Paris : Ducher, 1878-1881. 2 v.

- 17) オージェの関わる作はわずかにオペラ『サフォー』の歌詞があるのみ。

- 18) Histoire universelle du théâtre / par Alphonse Royer. Paris : Librairie A. Franck, 1869-1870. 4 v.

続巻として5, 6巻が別名で、新しい版元から出ている。『目録』には、ただ次のように掲げられている。

(0110) SB 772. 35 / R 79

Histoire du théâtre contemporain en France et à l'étranger depuis 1800 jusqu'à 1875 / par Alphonse Royer. Paris, Ollendorff, 1878. 6 v. (Histoire universelle du théâtre)

3. 1880年, 90年代の収書

この時期を約して言えば、官に入って外交の世界から出発し、ついで国内政治の要職を歴任する20年間である。1880年10月帰国ののち、兆民との『東洋自由新聞』創刊にともなう試練を経験するが、1年半後の82年3月にはまた横浜を出港し、ヨーロッパへ出向くことになる。参事院議官補として、伊藤博文の憲法調査に随行するためである。この2度目のヨーロッパ渡航のさいには、パリで板垣退助に再会し、旧知のアコラスなどに引き合わせたりしている。

1年余を経て83年8月に帰国したあとも、日本での生活は1年半で、こんどはオーストリア駐在特命全権公使に任ぜられ、85年4月に出発している。オーストリア在勤は約1年、さらに87年にドイツ公使に任ぜられ〔ベルギー公使兼務〕、91年8月帰国。つまり、80年代も3度の渡航で、なかばはヨーロッパ暮らしであった。

帰国のあとの90年代は国内で顕職をつぎつぎとめる。91年9月賞勲局総裁、93年11月貴族院副議長、94年5月枢密顧問官、9月第2次伊藤内閣文相、95年6月〔陸奥宗光病気のため〕外務大

臣臨時代理、96年5月外相兼任…。しかし、96年の秋にはさまざまな職を退いて、年末から翌97年10月まで1年近くをヨーロッパに遊ぶ。5度目の滞在である。

ヨーロッパ調査旅行や、それにつづく外交官生活のあいだの知見の深まりを蔵書についてうかがうとすれば、まず語学関係の辞書類のあれこれも端的な例であろう。ブラシュの『フランス語源辞典』¹⁾、スーリス他の『フランス文法辞典』²⁾、サルドゥの『フランス類語辞典』³⁾などは今日でも役に立ちそうな辞書である。フランス語に磨きをかけるのを怠らなかったのであろう。

社交生活の参考になったであろう本をいくつか挙げれば、まず（刊行年は72年だが）『フランス・スポーツ辞典』⁴⁾。これは名前とちがって、内容はヨーロッパにおける競馬のてごろな便覧である。ピエール・ヴェロン『歴史の仮装行列（マスカラード）』⁵⁾は、歴史上の人物をめぐる気軽な逸話集。『地口、ことば遊び辞典』⁶⁾などというのものもある。著者名はふざけたペン・ネームになっている安手の本だが、こうしたものは西園寺の座談の種本にもなっていたと思われる。

ヨーロッパ生活を深く知るための、いわゆる教養書として、たとえばエルヌーフ男爵『庭園・池泉・遊歩道』⁷⁾は造園術にかかわる歴史研究であり、アンリ・アヴァール『家庭における芸術——室内装飾の基本』⁸⁾は、数多い挿絵も入った、信頼すべき手引である。ドイツの日本研究家ユリウス・クルトによる『日本の精神』はおそらくドイツ公使時代に入手したものと思われる。おなじく外国人による優れた日本研究の成果としてB. H. チェンバレンの2冊の日本語研究も見られる。こうした本格的な研究書はつとめて収集の対象としているように思われる。

『ベルリン写真集』は今日では貴重にちがいない美本であるが、これはドイツに滞在した法学者岡村司から中川小十郎への呈辞があり、のちに中川から文庫に入れられたものであることが知れる。しかし、西園寺が在勤したころのベルリンを偲ぶには恰好の1冊である。また、フランス語の『ボンベイ旅行案内』は旅行の機会に求めたと思われる。

西園寺には天文への興味もあったようだが、フランス書でそれを示すのがカミーユ・フラマリオンの『星と天空のふしぎ』。もちろん、大衆的解説書である。ひとの骨相や表情にも関心があったようで、（刊行年は不詳だが）『骨相学概説』⁹⁾、A. ジロデ『表情としぐさ』¹⁰⁾などが見られる。J. G. パラア『鉄道法制、規定辞典』¹¹⁾という大きな2巻本が見当たすが、どういう関心からであろうか？ 刊行は1872年から81年にわたるから、おそらく80年代に購われたのであろう。日本における鉄道国有化は1906（明治39）年、第1次西園寺内閣によって実現したのだが、西園寺の政治判断のもとにはヨーロッパの鉄道事情についての知識が働いていたのであろうか？

演劇書についてはすでに70年代の章でまとめて述べた。くりかえすが、80年、90年代のその数は多くない。ドイツ駐箚のあいだもパリはしばしば出かけたとはいえ、やはり観劇の機会は減ったであろう。この時期で忘れられないのは、ジュディット・ゴーチエの献辞が扉の次に印刷されている5幕2部の「日本戯曲」『微笑みを売る女』¹²⁾（88年）であろう。同じ80年代に刊行されて、だれもが知る『蜻蛉集』¹³⁾とともに、生涯にわたる二人の交友のよすがである。

文芸書として、ルコント・ドゥ・リール訳の『イリアッド』、『オディッセー』、カーライル『英雄崇拜』の仏訳、デュマ・フィス『バグダッドの王女』、カチュール・マンデス『最初の愛人』¹⁴⁾といった小説がある。西園寺のフランス文芸への親灸の例として、同時代の作家であったゾラ愛読のことがよくあげられる。しかし、文庫中、和書には飯田旗郎訳『巴里』2冊（1908、明治41年）があるが、洋書にはゾラの関わる著作はただ歌劇『メシドール』（歌詞を担当）と、トル

ストイ『金銭と労働』への序文があるのみで、小説は1作も見当たらない。

そうしたうちで、同時代人とも言うるトルストイのフランス語訳¹⁵⁾5冊が注目されている。いずれも87, 88年を中心に90年代にかけての刊行、収書である。戯曲『闇の力』以外は論文で、『何をなすべきか』、『学校における自由』（いずれも88年刊行）、『金銭と労働』（刊行年なし）、『芸術とは何か』（98年刊行）。西園寺が教育に強い関心を示し、2度におよぶ文相の任期において独自の施策をうちだそうとしたことは、最近完結した『西園寺公望伝』¹⁶⁾も強調しているところだが、トルストイの教育論がはらむ矯激な問題提起も、あるいはそうした関心を誘発したものであるかも知れない。『学校における自由』は最初のフランス語訳と銘うっており、日本語訳が出るのははるか後年のことであるから、西園寺は当然この版によってトルストイを読んだのであろう。

文部省から出版された、英語版の『日本近代教育の概観』¹⁷⁾も文庫には保存されている。これは西園寺が文部大臣に就任する前年の刊行であるが、ようやく形をととのえた近代教育の姿を国外に示す里程標と見てよいであろう。

- 1) (0120) SB 852 / B 71

Dictionnaire étymologique de la langue française / par Auguste Brachet. 15e éd. Paris : Bibliothèque d'éducation, 1880. 560 p. Ouvrage couronné par l'Académie française.

- 2) (0124) SB 853 / So 82

Petit dictionnaire raisonné des difficultés et exceptions de la langue française / par Th. Soulice et A. L. Sardou. Paris : Hachette. 1886. 573 p.

- 3) (0125) SB 853. 5 / Sa 69

Nouveau dictionnaire des synonymes français / par A. L. Sardou. Paris : Ch. Delagrave. [189-] 580 p.

- 4) (0111) SB 780. 33 / P 31

Dictionnaire du sport français / par Ned Pearson. Paris : Lorenz. 1872. 676 p.

- 5) (0136) SB 950. 2 / V 62

La mascarade de l'histoire / par Pierre Véron. Paris : Dentu. 1882.

ピエール・ヴェロン（1833-1900）は作家、ジャーナリスト。有名な雑誌『シャリヴァリ』を発行し、パリ風俗をめぐる多数の本を書いた。

- 6) (0126) SB 853. 9 / P 76

Dictionnaire des calembours et des jeux de mots, lazzis, coq-à-l'âne, quolibets, quiproquos, amphigouris, etc. / par le baron De la pointe et le Dr Eugène Le Gai. Paris : Delarue. [19--]

- 7) (0092) SB 629. 5 / E 68

Parcs_jardins_promenades : étude historique_principes de la composition des jardins_plantations. Décoration pittoresque et artistique des parcs et jardins publics. Traité pratique et didactique / par le baron Ernouf, entièrement refondue, avec le concours de A. Alphand. 3e éd. Paris : J. Rothschild. [18--]

- 8) (0099) SB 757. 8 / H 45

L'art dans la maison : grammaire de l'ameublement / par Henry Havard. Nouv. éd. illustrée de 260 gravures. Paris : Rouveyre, [1882] 2 t.

- 9) (0006) SB 148. 1 / L 38

Traité de phrénologie : d'après les méthodes de Lavater, Gall & Spurzheim. Paris : Delarue, 18--.
Lavater …などの名を示しているが、著者ではない。著者名のない通俗書。

- 10) (0109) SB 771. 7 / G 47

Physionomie et gestes : méthode pratique d'après le système de F. Del Sartre pour servir à l'expression des sentiments par A. Giraudet ; avec 34 planches hors texte, composées de 250 figures. Paris : Librairies-Imprimeries, 1895.

著者のジロデはオペラ座の歌手でコンセルヴァトワール教授。

- 11) (0095) SB 686. 1 / P 17

Dictionnaire législatif et réglementaire des chemins de fer / par J. G. Palaa. 2e éd. Paris : Cosse, Marchal et Billard, [1872-81] 2 v.

- 12) (0148) SB 952 / G 27

La marchande de sourires : pièce japonaise : en cinq actes et deux parties / par Judith Gautier ; prologue par Armand Silvestre ; musique de Benedictus. Paris : G. Charpentier, 1888.

Hommage

A

M. Le Marquis Saionzi

Envoyé extraordinaire et Ministre plénipotentiaire de

Sa Majesté l'empereur du Japon

日本の皇帝陛下の

特使にして全権公使たる

西園寺侯爵に

謹呈

なお、ジュディット・ゴーチェは西園寺をつねに Saionzi と綴っている。

- 13) (0129) SB 911. 1351 / Sa 22

Poèmes de la libellule / traduits du japonais d'après la version littérale de M. Saionzi, conseiller d'Etat de S. M. l'empereur du Japon ; par J. Gautier ; illustrés par Yamamoto. Paris : Gillot, [1885.]

- 14) (0164) SB 953 / Me 44

La première maîtresse : roman contemporain / par Catulle Mendès. Paris : G. Charpentier, 1888.

著者のカチュール・マンデス（1841-1909）は知名の詩人、劇作家、小説家。わずかのあいだだが、ジュディット・ゴーチェはその最初の妻であった。西園寺は、あるいは私的な興味からこの本を求めたのかも知れない。

- 15) 文中に挙げる順で、『目録』の番号は（0168）（0170）（0085）（0169）（0096）

- 16) 立命館大学編『西園寺公望伝』全6巻（岩波書店、1990-97）のとりわけ伝記第2巻の第4および第5章。

- 17) (0084) SB 372. 1 / J 24

Outline of the modern education in Japan / translated and published by the Department of Education (モンブショウ). Tokyo : The Department of Education, 1893.

4. 1900年, 1910年代の収書

西園寺は1900年に枢密院議長, 03年に政友会第2代総裁, 06年1月第1次西園寺内閣組閣（08年7月まで）, 11年8月第2次西園寺内閣組閣, 12年12月総辞職して同月元老となる。この年代が、彼が政治の表舞台のもっとも中心にあった時期と言えよう。

13年から京都にしりぞき, さらに政友会総裁も辞任したが, 19年ヴェルサーユにおける世界大

戦講和会議に全権大使として出席する。

この20年間に日本は、日露戦争、第1次世界大戦とふたつの戦争を経験している。すでに1894-95（明治27-28）年の日清戦争での勝利以来、日本の台頭は欧米諸国の警戒を招いていたが、黄禍論はますます高まりを見せる。日露の戦いから世界大戦の始まりまでわずか10年。西園寺の蔵書は、西洋における日本観、列強のパワー・ポリティクスへの関心を映している。西園寺にとってドイツはかつて公使として在勤した地でもあり、大戦の原因とその経緯の検討は当然深い関心事であったことが蔵書からよく察せられる。西園寺のフランス語蔵書は、1900年以降しばらくして初めて公人としての政治的関心をはっきり示すようになったと言いうるだろう。

世紀の初頭はまだ西園寺もベル・エポックののどかな書見を楽しめたようだ。ジョルジュ・オーネの小説『婚礼の一行』（1900年）、サルセーの劇評集『演劇四十年』（1900-02年）、アンリ・ラヴダンの小説『よい時代』（06年）…。ラヴダンはのちにもう1作『わが名づけ子』（11年）が蔵されているが、この作家は洒落な筆でパリ風俗を描いて西園寺好みのように思われる。アナトール・フランスの『ペンギンの島』も皮肉な筆致が気に入ったであろう。ジョゼフ・ペラダンの小説『ピサの恋人たち』¹⁾は心理小説として読んだものか。そのほか『シラノ』につづいて、おなじ作者の『鷺の子』（10年版）、『シャントクレール』²⁾（10年）も見出される。

百科辞典としては、クロード・オージェ編『挿絵入り新ラルース』9巻、同じ編者の雑誌形式の『挿絵入り月刊ラルース』²⁾2巻があるのみだが、およその用はこれで足りるといえよう。

日露戦争における日本の勝利は西洋諸国を震駭させたが、やがて日本を、近代日本の姿を描こうとした一連の著作が登場してくる。それらの多くは、あからさまな黄禍論と分類されるものかも知れない。レオ・ビラム『小さなジャップがいずれ大きくなる！——極東における日本の膨張』⁴⁾（ジュール・クラルシ序文）、ルイ・オベール『アメリカ人と日本人——ハワイ、カリフォルニア、カナダ、南米における日本人移民——経済的、社会的、政治的対立——合衆国、日本および列強』⁵⁾、リュドヴィック・ノドー『近代日本——その発展』⁶⁾、それに、ダンリ大尉著『黄色人種の侵入』⁷⁾という表題の、小説仕立ての奇妙な連作。

これらの著述の若干には珍しく赤鉛筆による線引きが見られる。もちろん、西園寺の手という確証はないが、そう考えるのは間違っているようにも思えない。たとえば、ノドーの著作の218-9ページにはこんな記述があり、朱で下線が付されている。「もし、マンチューリ〔満州〕の戦争〔日露戦争〕において、ロシア軍がしたように日本軍が絶えず退却を余儀なくさせられたら、民衆は必ずや主だった将軍たちの家を焼いたであろう。おそらくは、将軍たちの家族を死に至らしめることもあったろう。あるいは、国が内乱に陥ったろう。

もしロシア艦隊が対馬で勝利していたら、日本に住んでいるフランス人はみな殺害されたであろうこと疑いはない」。この記述は、講和反対を叫ぶ民衆の暴動を見たあとで、「もしや」という想定を試みたもので、過敏に思われるかも知れない推論だが、外国人ならではの鋭い指摘と西園寺は感じたのであろう。

ルイ・オベールの著作には露骨な人種主義的発言が随所に見られると言ってよい。たとえば日本人排斥を正当化する理由として、179ページには、こんな叙述がある。「使っているうちに、労働者そのものというのは存在しないことが人にはわかってくる。労働者としてひとつの階級に属

する前に、人としてひとつの文明に属することがわかってくる。ところが、日本文明とヨーロッパ文明とはこれまで、それぞれの個人のあいだに同じ欲求を育ててこなかった」。ここには、!!という朱が付されている。「白人種の本音を聞いて、呆れた」ということでもあろうか…。

この本では、移民も日本の勢力拡張政策の一環ととらえられているが、本の最後の結論として、アメリカ、日本、中国の3国の関係を予測している末尾の余白にも縦に朱で一線が引かれている。この場合は、白人社会の一部にある、注目していい見方という感想であろう。あらましの趣旨は、日本の経済的利益から太平洋地域を確保しようとする、未来の帝国の野望は、軍備の増強から日本を戦争にみちびきかねない。そして、日本の当面の関心は政情不安定な中国にあり、両国間に予想される衝突によって、列強は日本とことを構える必要がなくなる、というのである。

アメリカにおける日本移民の問題については、ほかに英書でシドニー・L・ガリック『日系アメリカ人問題⁸⁾』が架蔵されている。

日露戦争そのものを検討の対象にした著作も出ている。ロシア陸軍参謀本部による浩瀚な戦史のフランス語訳で、フランス陸軍参謀本部の手になるものである。全4巻7冊の大型本、約4,000ページの膨大なもので、こうした規模の著作が戦後さほど日をおかず刊行、さらには翻訳されたことに目をみはる。また、旅順攻防をめぐる桜井忠温の『肉弾』（フランス語題名 *Mitraille humaine*）は有名だが、西園寺文庫にあるのは同じ作者の『銃後』のフランス訳『銃をにぎって——旅順攻略回想記¹⁰⁾』である。これはフランス海軍のドゥ・バランクール艦長によるもので、序文を当時の首相大隈重信と、陸軍省医務局長森林太郎¹¹⁾が寄せている。

もちろん、この時期にあっても、政治や軍事にかかわらない書目はさまざまに見られる。ジュディット・ゴーチエの献辞のある、もう1冊の著書『日本——すばらしい物語¹²⁾』（12年）に描かれている日本は、つねに夢のかなたにある日本である。ジョルジュ・プチ画廊の売立てのための『日本美術品図録——日本漆器のすばらしいコレクション（コルメダージュ・コレクション）』（12年）、イギリスの宝飾店マピン & ウエップの部厚い商品カタログ（10年）。

外国人読者のために内外で出された、日本にかかわる英語出版物の注目すべきものも取っておかれている。しかるべき吟味を経たことを思わせる。西園寺周辺の人物のひとりである竹越三叉による『日本の台湾統治¹³⁾』（ただし、中川寄贈）。松村瞭『民族学地名辞典¹⁴⁾』は英和対照になっており、当時の学術的達成を見せて、しかも実用の宝典と見える。『1910年英国における日本博覧会公式報告書¹⁵⁾』は551ページの大冊である。横浜のジャパン・ガゼット社が発行した堂々たる『日本貴族年鑑¹⁶⁾』第1版。望月小太郎編『先帝明治大帝¹⁷⁾』。鉄道院による画期的水準の事業と言える『東アジア公式旅行案内¹⁸⁾』全5冊。人目を引く出版物ではないが、日本コンコルディア協会による第1次、第2次の年間報告。

日本人画家にかかわる2冊も挙げねばならない。いずれもロンドンの同じ版元からで、まず、アカデミー・ゴンクール¹⁹⁾の会員である作家たちによる『パリの色——歴史と人と土地』。挿絵がYoshio Markino（牧野義雄）。もうひとつは、牧野自身による『日本人画工倫敦日記』（これは中川寄贈²⁰⁾）。西園寺と牧野に個人的なつながりがあったかどうか知らないが、この時代に日本人がヨーロッパ画壇でこれだけの評価を得るのは希有と言っていいだろう。しかも、都市風俗を描いて。どちらも、楽しげで洒落た本である。

大型の豪華本だが、風流韻事にかかわらないもので、ドイツ・クルップ社の『クルップ 1812-1912 発展の1世紀』ドイツ語版が創立100年記念の社史である。²¹⁾ずっと小型のフランス語版²²⁾もあわせて蔵されている。

第1次大戦に関する一群の図書がある。もうすこし具体的に言えば、戦争前夜のヨーロッパ情勢、とりわけドイツの動向、大戦勃発の原因の検討、あるいは戦中のドイツの行為にかかわる図書である。刊行年で言えば、1909年から18年に及ぶ。これらの図書は、西園寺自身あるいは彼に近い外交関係者あたりの手で入手されたものであろう。また、大戦にじかにかかわる書籍には、パリ講和会議出席のさい会議事務局、在仏日本大使館、あるいは随行者の手によって調べられたものもあろう。これらの図書の若干にはかなりの書き込みも見られ、相当の熱意で繙かれたことが察せられる。大戦にいたるまでのヨーロッパ政治の成行はもとより西園寺にとって重要な関心事であったが、それは単に政治の世界の問題ではなく、文明の帰趨として眺められていたことであろう。普仏戦争直後の最初のヨーロッパ滞在以来ほぼ50年の諸国の変転のなかで、かつて赴任地であった国の軌跡を追い、それにあわせて日本の今後を思いやる、西園寺ならではの長い射程の省察と感慨があったろう。会議出席の19年には、公望70才であった。

そうした書目を刊行年の順に挙げる。執筆者は外交の専門家、ジャーナリスト、作家、軍人などさまざまで、官庁文書もある。11年にE.シャルム『ヨーロッパにおける外交政策の現在の問題』。12年にジュール・ユレの『ドイツにて——ベルリン』。作者は有名なジャーナリストで、ルポルタージュを諸外国についておこなっているが、これはそのドイツ編の1冊。西園寺に親しいベルリンの巻をまず選んだのであろう。ついで、ガブリエル・アノトーの本が2冊。アノトーは西園寺と親しかったフランスの元外交官で、著述家として有名になり、すでにアカデミー・フランセーズ会員であった。12年に『外交研究 均衡政策 1907-1911』²³⁾。14年に『外交研究（第2集）——バルカン戦争とヨーロッパ 1912-1913』²⁴⁾。どちらも時評の形の外政論だが、前者にかなりの書き入れがある。その時期は大戦前と思われる。そう考えるのは、ドイツと諸国との軋轢は外交努力で解消できるという楽観論がアノトーの持説なのだが、たびたび繰り返される、そうした論旨の箇所（おそらくは共感の）朱線が引かれているからである。つまり、外交の専門家であったアノトーは重要な予測の誤りをおかし、西園寺もその見解をそのままに受け取っていたことが推察される。

14年にはさらに、アンリ・アンドリヨン『ドイツの拡張——その理由、形態、結果』とシャルル・モラス『キールとタンジェール』²⁵⁾。後者は、当時フランスに滞在中であった島崎藤村から贈られたもの。「陶菴先生小呈す / 大正四年二月 / 巴里の客舎にて / 藤村生」の献辞がある。藤村は雨声会に連なったひとりで、そのフランスへの渡航について西園寺はジュディット・ゴーチエへの紹介状を書くなど、いろいろ便宜を計ったという。²⁶⁾大正4年は1915年で開戦以来半年。時局を考えて、この本を見つুকろったものである。

15年には『フランスにおけるドイツの残虐行為——敵による人権侵害行為確認のために設置された委員会により、総理大臣に提出された報告』。『われ弾劾す!』、ドレフュス事件におけるゾラの有名な文章の表題を借りた書名で、著者名は匿名で「一ドイツ人」となっている。内部告発の形をとった、前者と同様の内容の文書。ベルギーで出された、バイエンス男爵『戦前のドイ

ツ——原因と責任』。

16年にアンドレ・シェラダム『仮面をはがされた汎ゲルマン主義計画——「引き分け」の恐るべきベルリンの罫²⁷⁾』、イーヴ・ギュイヨ『戦争の原因と結果』（第2版）。『国際協定から見た、フランスとドイツにおける捕虜の処遇 1914-1916』、フランス外務省の文書で『リアルおよびフランス北部地方におけるドイツ人』。18年に、ユナイティッド・プレス²⁸⁾のベルリン通信員のカール・W.・アッカーマン『銃後のドイツ』（フランス語版）。

英語の本が2冊。16年のフェルナン・パスレック『真実とごまかし——ドイツの白書に対するベルギー政府の回答の分析的研²⁹⁾究』。17(?)年のアーノルド・J・トインビー『ベルギーにおける国外流刑措置』。まだ20代のトインビーの名を見出して驚くが、彼はこの戦中、ドイツの残虐行為に関する調査をいくつかおこなっている。

こうした著作のひとつとして、ギュスターヴ・ルボンの戦中の著書『戦争の最初の結果のいろいろ』³⁰⁾（16年）を取りあげよう。ルボンは社会心理、とりわけ群衆心理の研究家として当時よく読まれた人だが、その著作は計3冊架蔵されている。他の2冊は『諸民族の進化の心理法則』³¹⁾（1911年）、『真実のうちの生』³²⁾（14年）。西園寺に近い本野一郎にはルボンの日本語訳もあり、この人の著書が西園寺の手元にあるのは自然かも知れない。ことに、政治家として民意をつかもうとするとき、しばしば得体の知れない群衆の感情と向きあうことになるだけに、このフランス人の著作が興味をもたれて不思議はない。16年刊のこの本には、珍しくあちこちに下線が入り、余白に内容の要約が書きとめられている。発刊後すぐに読まれたと思われる。

たとえば、開戦とともに民衆の国家意識が強まって階級の利害が忘れられたこと、日本にかかわる言及についての感想、クルップなどドイツ軍需産業の利益、参戦前のアメリカから第三国を通したドイツへの農産物輸出という冷徹な国益中心主義、国民性における「英独ノ別」、「英国ノ強」の因ってきたるは制海権にあること、国家間の大事が首脳会談によって決せられ「外交官ノ無用」となったこと…など。非常時下についての警拔な指摘にかなり興を覚えているようだ。

1) 『目録』に脱落。書名は註、1-4c. に示した。

2) (0004) SB 035 / L 32

Nouveau Larousse illustré : Dictionnaire universel encyclopédique / publié sous la direction de Claude Augé. Paris : Librairie Larousse, 1898-1904. 9 v.

3) (0002) SB 035 / A 96

Larousse mensuel illustré : revue encyclopédique universelle publiée sous la direction de Claude Augé. Paris : Larousse, 1907-13.

4) (0023) SB 210. 6 / B 99

Petit Jap deviendra grand ! : l'expansion japonaise en Extrême-Orient / par Léo Byram ; préface de Jules Claretie. Paris : Berger-Levrault, 1908. 398 p.

5) (0081) SB 334. 453 / A 96

Américains et Japonais : l'émigration japonaise aux Hawaï, en Californie, au Canada et dans l'Amérique du Sud : le conflit économique, social et politique : les Etats-Unis, le Japon et les puissances / par Louis Aubert. Paris : A. Colin, 1908. 430 p.

6) (0024) SB 210. 6 / N 59

Le Japon moderne : son évolution / par Ludovic Naudeau. Paris : Flammarion, 1909. 404 p. (Bibliothèque de philosophie scientifique)

- 7) 『目録』の(0011)から(0013)までの3冊に記されている題名は連作の副題で、共通する表題は *L'invasion jaune* (『黄色人種の侵入』)。なお、ダンリ (Danrit) はアナグラムで、本名は *Emile-Auguste-Cyprien Driant* (1855-1916)。軍人で、多くの軍事小説を残した。ヴェルダンの戦いで戦死。
- 8) (0069) SB 316. 853 / G 95
The American Japanese Problem : a study of the racial relations of the East and the West / by Sidney L. Gulick. New York : C. Scribner's Sons, 1914.
- 9) 『目録』の(0026)から(0029)までの4冊に記されている題名は副題で、共通する表題は *Guerre Russo-Japonaise 1904-1905 : historique rédigé à l'état-major général de l'armée russe* (『露日戦争 1904-1905 ロシア軍参謀本部で編纂された戦史』)。
- 10) (0131) SB 913. 6 / Sa 43
Fusil en main : souvenirs du siège de Port-Arthur / par le capitaine Tadayoshi Sakourai. Paris : Augustin Challamel, 1916. 398 p.
 A son Excellence le marquis Saionzi (訳文) 西園寺侯爵閣下に
 Très respectueux hommages 恭々しい敬意をもって
 Marquis de Balincourt バランクール侯爵
 ドゥ・バランクール艦長の名が著者名のごとくに扉ページの上に出ているが、同人は訳のほかに *Introduction* を記したに過ぎないと思われる。*Introduction* において、1913年10月、日本で桜井忠温に会い、その本をフランスで紹介するにいたった経緯を述べ、これが日露戦争についての自分の8冊目の本だとしている。ロシア海軍のセメノフ艦長の手記なども同様に成ったものであろう。
- 11) 扉ページで序文の筆者名が KINTARO-MORI と誤植されている。脚注があり、「陸軍省医務局長で、作家として著名であり、多数の小説により大きな成功を博している」。
- 12) (0022) SB 210 / G 27
Le Japon (merveilleuses histoires) / par Judith Gautier ; préface de Jean Aicard. Vincennes : Les Arts graphiques, 1912. 115 p. (Les beaux voyages)
 Pour les bébés (訳文) 西園寺侯爵の
 de Marquis Saionzi, 赤ちゃんたちに
 s'il en a (もし居られたら)
 Judith Gautier ジュディット・ゴーチエ
- 13) (0033) SB 222. 406 / Ta 62
Japanese rule in Formosa / by Yosaburo Takekoshi ; with preface by Baron Shimpei Goto ; translated by George Braithwaite. London : Longmans, Green, and Co., 1907.
- 14) (0086) SB 389. 033 / Ma 38
A Gazetteer of ethnology / by Akira Matsumura. Tokyo : Maruzen, 1908. 492 p.
 English and Japanese in parallel columns.
 松村瞭 (1880-1936) は人類学者。『日本著者名・人名典拠録』(日外アソシエーツ, 1989年) による。
- 15) (0091) SB 602. 1 / L 84
Official report of the Japan British Exhibition, 1910, at the Great White City, Shepherd's Bush, London.
- 16) (0083) SB 361. 81 / J 24
The "Japan Gazette" peerage of Japan. 1st ed. Yokohama : Japan Gazette Co., 1912. 951 p.
- 17) (0046) SB 288. 41 / Mo 12
The late Emperor of Japan as a world monarch : presented to their Imperial Majesties, the Emperor, Empress, and Dowager Empress as well as to the other members of the Imperial Family,

on the occasion of the first anniversary of the last Emperor's decease July 30, 1913 / compiled and edited by Kotaro Mochizuki. Tokyo : Liberal News Agency, 1914. 458 p.

- 18) (0059) SB 292. 25 / J 24 (0025) SB 210. 6 / Te 86 (0055) SB 291 / J 24 (0057) SB 292. 2 / J 24 (0060) SB 292. 3 / J 24

これらの総題は An official guide to Eastern Asia / prepared by the Imperial Japanese Government Railways. Tokyo : I. J. G. R. 全 5 冊。第 2 巻の分類番号だけが、大きく異っている。上記の分類番号は、巻次の順。巻名は順に、Manchuria & Chosen, South-western Japan, North-eastern Japan, China, East indies : including Philippine Islands, French Indo China, Malay Peninsula, and Dutch East Indies. おなじ順で、発行年は、1913, 1914, 1914, 1915, 1917。

- 19) (0061) SB 293. 5 / C 84

The colour of Paris : historic, personal & local / by Messieurs les académiciens Goncourt ; under the general editorship of M. Lucien Descaves ; illustrated by Yoshio Markino ; with introduction by M. L. Bénédite, conservateur du musée national du Luxembourg ; an essay by the artist. London : Chatto & Windus, 1908.

【目録】の Author index は挿画者の名をふくめるのが原則であるが、この本の Markino は脱落。

- 20) (0132) SB 914. 6 / Ma 52

A Japanese artist in London / written and illustrated by Yoshio Markino. London : Chatto & Windus, 1912.

- 21) (0044) SB 288. 3 / Kr 8

Krupp 1812-1912 / [herausgegeben auf der hundersten geburstag Alfred Krupp] [s. l. : s. n.] , 1912. 416 p. 38 cm.

- 22) (0045) SB 288. 3 / Kr 8

Krupp 1812-1912 un siècle d'évolution / Alfred Krupp. [s. l.] : Maison Krupp, 1912. 374 p.; 30 cm. "Traduction française de l'oeuvre commémorative".

- 23) (0074) SB 319. 3 / H 29

La politique de l'équilibre 1907-1911 / par Gabriel Hanotaux. 2e éd. Paris : Plon, 1912. (Etudes diplomatiques)

- 24) (0043) SB 239 / H 29

La guerre des Balkans et l'Europe, 1912-1913 / par Gabriel Hanotaux. 3 éd. Plon-Nourrit, 1914. (Etudes diplomatiques, deuxième série)

ここでは、【目録】とことなり、見出しの書名を (0074) に合せて、『外交研究』としなかった。

- 25) (0042) SB 235. 068 / Ma 96

Kiel et Tanger 1895-1905 : la République Française devant l'Europe / Charles Maurras. Paris : Nouvelle Librairie Nationale, 1914.

- 26) 河盛好蔵『藤村のバリ』（新潮社、1997年）pp. 4-6.

- 27) (0041) SB 234. 065 / C 39

Le plan pangermaniste démasqué : le redoutable piège berlinois de "la partie nulle" / André Chéradame. Paris : Plon, 1916.

この本には、著者シェラダムから外務大臣石井菊次郎への献辞があり、それによって文庫へ入ったいきさつが知れる。

なお、この本は日本語訳があり、これも文庫に架蔵されている。すなわち

(1198) SB 319. 34 / C 39

仮面を剥がれたる汎独政策 仏国シェラダム博士原著 外務省臨時調査部訳 東京 外交時報社出版部 1918

- 28) (0019) SB 209. 71 / P 26

Truth and travesty : an analytical study of the reply of the Belgian government to the German white book ("Die wolkerrechtwidrige Führung des belgischen volkskrieg") / by Fernand Passelecq. London : Sir J. Causton & sons, 1916.

註, 1-4b. に示した同著者による図書は、これに続くべきフランス語版。著者パスレックはベルギーの情報局長。

29) (0021) SB 209. 71 / To 79

The Belgian deportations / by Arnold Toynbee ; with a statement by Viscount Bryce. London : T. F. Unwin, 1917 ? 94 p.

30) (0018) SB 209. 71 / L 49

Premières conséquences de la guerre : transformation mentale des peuples / par Gustave Le Bon. Paris : Flammarion, 1916.

31) (0005) SB 140. 2 / L 49

Lois psychologiques de l'évolution des peuples / par Gustave Le Bon. Paris : F. Alcan, 1911.

32) (0007) SB 161 / L 46 (sic)

La vie des vérités / par Gustave Le Bon. Paris : Flammarion, 1914.

5. 1920年以降の収書

講和会議調印のあと帰国して公爵を授けられる。晩年の20年間、西園寺は最後の元老としてその死の直前まで政治に関与し、政界人の「興津詣」が絶えなかったことはよく知られる。しかし、それはあくまで政界の後見の立場にとどまり、その前面からは徐々に退いていく。

文庫に残る、1920年以降、40（昭和15）年逝去にいたるまでの時期の収書はさしたるものではない。それもほとんどは、いろいろな経路で集まったと思われる英書で、形態も官庁編纂の小冊子類が多く、書籍とというものは10数冊に過ぎない。

しかし、西園寺が晩年にフランス書を購入しなかったわけではない。年次を欠くが、昭和期のものと思われる原田熊雄宛書簡¹⁾では、10数冊の書物を巴里へ発注依頼している。おそらく、こうした図書は散逸したか、あるいは、いずれかに所在するのであろう。

文庫中の図書、パンフレットのなかで目をひく若干を紹介する。まず、日本研究にかかわる書籍がいくつかある。この面での本格的な業績として架蔵されたと思われる。たとえば、『古今集』を全訳した、T. ワカメダ訳『日本古代歌人集』²⁾。西園寺はみずからの『蜻蛉集』刊行を偲んだことであろう。あるいは、N. E. アイズマンガー勲爵士『日本語表記概要』³⁾。Sakurane Konoshin, Kusakabe Jutarō, hensan. : *Romaji Mannyoshu*⁴⁾ さらに、やはり中川寄贈であるが、竹越与三郎の著作がもう1種ある。浩瀚な3巻本の『日本経済史』⁴⁾である。

また、展覧会パンフレットではあるが、『書籍展——英国印刷および造本史資料』⁶⁾は、関東大震災のあと英国政府から東京大学への図書の寄贈にさいしてつくられたもの。寄贈品の質の高さがうかがわれる展観で、あるいは西園寺自身が足を運んだのかも知れない。こうした冊子がつっておかれていることに、読書人の面目を見るべきであろう。

西園寺の最晩年はもはや戦火の時代であることが英語のパンフレットではっきりと知られる。日本外事協会刊行の6冊。いずれも、いわゆる日支事変が勃発した37（昭和12）年に踵を接して

出された10から50ページ程度のもの。刊行の順に『北支事変はいかにして起ったか』⁷⁾、『日支事変と財源』シンポジウム⁸⁾、『なぜ日本は上海で戦わねばならなかったか』⁹⁾、『上海の交戦における日本の主張』¹⁰⁾、『日支事変——略説』¹¹⁾、太田三郎『支那事変の意義』¹²⁾。

フランス語のパンフレットも2点見当たる。日仏協会刊行の曾我祐邦『曾我子爵の公開状』¹³⁾と『日支事変における日本の位置——曾我子爵談話』¹⁴⁾である。ほかに、フランス語の本はピエール・ロチの『夢去りし女たち——現代トルコ・ハーレム物語』¹⁵⁾だけである。

そして、39年にはドイツ語の『1939年10月6日ドイツ帝国議会総統演説』¹⁶⁾、40年に在日英国大使館広報部刊行のヒューグ・バイアス『なぜ英国は戦うか』¹⁷⁾。しかし、90才を越えた類齢の西園寺にこれらを披見する気力は残っていたであろうか？

〔付記〕 筆者はフランス語の教員として仏学史に多少の関心をもっているが、西園寺公望の伝記についてさしたる知識をもちあわせていない。したがって、記述に不正確のあるのを恐れ、本学の西園寺公望伝編纂室にあって長年その伝記刊行に尽力された福井純子女史に原稿の一読をお願いし、いろいろとご教示をいただいた。記して厚く御礼を申上げる。もちろん、文中にありうる誤謬の責がすべて筆者に帰することは言うまでもない。

1) 原田熊雄宛書簡 二（立命館大学編『西園寺公望伝』別巻一 p. 237）

2) (0130) SB 911. 1351 / W 21

Early Japanese poets : complete translation of the Kokinshu / by T. Wakameda ; introduction by I. Kobayashi. London : The Eastern Press, 1922.

3) ((0112) SB 811 / I 69

The elements of Japanese writing / by Commander N. E. Isemonger. London : The Royal Asiatic Society, 1929.

4) (0128) SB 911. 12 / Sa 48

Osaka : Teikoku Romaji klab, 1935.

5) (0079) SB 332 / Ta 62

The economic aspects of the history of the civilization of Japan / by Yosaburo Takekoshi. London : George Allen & Unwin, 1930.

6) (0001) SB 027. 7 / E 93

Exhibition of books : illustrative of the history of English printing and book production. Presented by H. M. Government to the Imperial University of Tokyo. London : printed under the authority of H. M. S. O. by W. Clowes and Sons, 1929. 41 p.

7) (0031) SB 222. 07 / H 96

How the North China affair arose. 51 p.

以下、註11)まで、出版者はすべて Tokyo : The Foreign Affairs Association of Japan (Nihon Gaiji Kyokai). 出版年は1937（ただし註11)は不明）。

8) (0080) SB 332. 1 / N 75

The Sino-Japanese conflict and financial resources : a symposium. 37 p.

9) (0071) SB 319. 1022 / N 71

Why Japan had to fight in Shanghai. 54 p.

10) (0070) SB 319. 1022 / N 71

Japan's case in the Shanghai hostilities. 13 p.

- 11) (0032) SB 222. 075 / N 71
The Sino-Japanese conflict : a short survey. 10 p.
- 12) (0072) SB 319. 1022 / 0 27
The significance of the China affairs / by Sabroh Ohta. [193- ?] 20 p.
- 13) (0050) SB 289. 3 / So 25
Lettre ouverte de Monsieur le Vicomte Soga. Tokyo : La Société franco-japonaise (Nichi-Futsu kyokai), 1937. 5 p.
- 14) (0030) SB 210. 7 / P 84
La position du Japon dans le conflit Sino-Japonais : discours prononcé par le vicomte Soga. Tokyo : Le Comité franco-japonais, 1937. 5 p.
- 15) (0151) SB 953 / L 91
Les désenchantées : roman des harems turcs contemporains / par Pierre Loti. 34e éd. Paris : Calmann-Lévy, [1936] 初版は1906年。
- 16) (0067) SB 312. 34 / R 22
Reichstagsrede des Führers am 6. Oktober 1939. [s. n.] : [s. l.], 1939. 31 p.
- 17) (0035) SB 233. 07 / B 98
Why Britain is fighting / by Hugh Byas. Tokyo : Department of information British Embassy, 1940. 18 p.